

F-15 食物領域における学習指導内容の研究 その2.炊飯学習の定着度について
別府大短大 江後迪子 広島文教女大短大 豊後孝江

目的 炊飯については小・中・高の家庭科教育の中で各々に基礎的学習として取り上げられているが、自動炊飯器の普及が著しい中で、炊飯が正しく理解されているかについて今春短大入学生を対象にその定着度を調べ、今後の教育に役立てたいと考えた。

方法 調査対象 大分県および広島県の短大一年生 181名

調査時期および方法 昭和55年5月～6月 質問紙法

結果および考察 調査対象について、入学後4回炊飯実習した後指示した米量に対する炊き水量を算出させ炊飯に関する理解の一尺度とした。対象者は入学前までに小・中・高校および家庭において炊飯を理解したと答え(83.4%)これらのうち家庭で習った者26.0%危険率5%で有意であった。家庭の炊飯方法は電気・ガス自動炊飯器利用91.7%を占め両者の差は見出せなかった。学校学習は小・中校は電気炊飯器、高校電気・ガス炊飯器が有意に多く鍋類利用は約20%程度にすぎない。炊き水量正解率60.2%であり、家庭科履習の程度(家庭一般、被服のみ、食物I以上)と正解率との間に危険率5%で有意差が認められた。すなわち食物I以上の履習者に炊飯についての理解が定着していると考えられた。家庭内における食生活のかかわり方は買物、準備、調理(夕食)後片づけなど、すべて対象者のほとんどが時々あるは一部を占め、家庭で炊飯を理解したというもののこれらの因子と正解率との間には特に有意差は認められなかった。調査者中36名についてくり返し炊飯実習を行なった結果やや成績の向上は認められたが、家庭、学校で自動炊飯器を利用することは炊飯を理解させる上でマシナスの要素となるのではなかろうか。